

茶会記 Riverside Jazz Story 第 5 回 2011-2-5

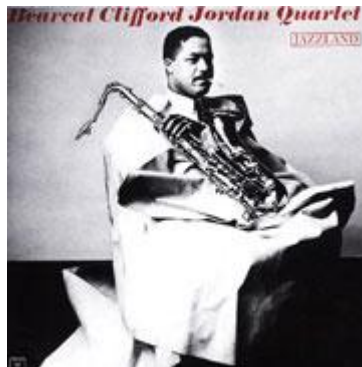
<Riverside Label 裏街道～サククス&モア！>



Jimmy Heath The Quota (RLP12-372)

第 5 回の「裏街道リヴァーサイド」は、サクスの二番手三番手の中から忘れられない作品を聴いて行こう。恥ずかしいが、ジャケットだけは覚えていたが、Red Garlandの作品に客演したジミー・ヘースの演奏でタイトル曲を聴いて初めて手に入れた作品が、写真をコラージュした『Jimmy Heath /The Quota』(RLP12-372)だ。

Wynton Kelly, Paul Chambers, Curtis Fuller が参加した『The Thumper』(RLP12-314)に比べると役者落ちの感は否めないが、Julius Watkins (frh) Freddie Hubbard (tp) との 3 管編成のサウンドは、この時代の感覚をストレートに伝えて、ジャズ喫茶全盛期の風景が浮かんでくる作品だ。「Riverside 版ジャズメッセンジャーズ」といった内容の演奏は、BN に対する対抗心が見え隠れする。ヘース・ブラザーズ 3 人の団結がこの作品に成功をもたらした。



『Jimmy Heath / The Quota』 (RLP12-372)

Jimmy Heath (ts) Freddie Hubbard (tp) Julius Watkins (frh) Cedar Walton (p) Percy Heath (b) Albert Heath (ds) Rec.1961-4-14 & 20, NYC.

M1.The Quota

5:09

『Clifford Jordan / Beacat』 (Jazzland JLP-69)

M2.How Deep Is The Ocean

5:04

Clifford Jordan (ts) Cedar Walton (p) Teddy Smith (b) J.C. Moses (ds)
Rec.1961-12-28 /1962-1-10、NYC.

BN盤も人気だし、近年は Muse 原盤が裏人気でオークションでバカ値をつけているクリフォード・ジョーダン。今回はジャズランドへ残したワンホーン・アルバムを紹介。シンプルな音色と素直なフレーズがモダンジャズの火が燃えていた時期を彷彿させてくれる。いかにもジャズらしい表現は近年のひねくり過ぎた演奏とは一線を画して楽しい。「歌えるソロ・メロディ」をご堪能あれ！

『Sonny Red / Images』 (Jazzland JLP-974)

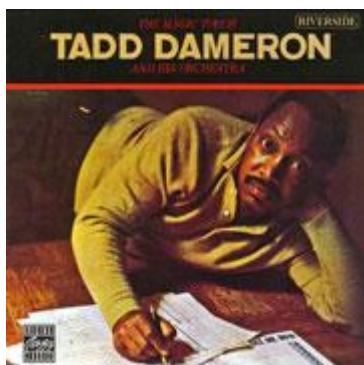
M3. Bewitched

5:45

Sonny Red (as) Grant Green (g) Barry Harris (p) George Tucker (b) Jimmy Cobb (ds)
Rec. 1961-12, NYC.

次は渋めのアルトサックスのソニー・レッド。もちろん、初めて知ったのは、『Curtis Fuller with Red Garland』(New Jazz)でのこと、それ以来、気になるアルトになったばかりでなく、アルト+トロンボーンという組み合わせを結構探したのを覚えている。渡辺貞夫がトロンボーンを自分のグループで使っていたのも、音域の点でのサウンド効果だったのだろう。ここでのレッドは、淡々とメロディラインのイメージを素直に膨らませるプレイで実力を示してくれる。

次はリヴァーサイドの中でも比較的地味だが、内容の良い2枚を探り上げてみた。



『Tad Dameron / The Magic Touch』 (Riverside RLP-9419)

M4. Our Delight

2:49

Tad Dameron (arr.cond.) Clark Terry (tp) Ernie Royal (tp) Joe Wilder (p) Jimmy Cleveland (tb) Britt Woodman (tp) Julius Watkins (frh) Leo Wright (fl,as) Jerry Dodgion (as,fl) Jerome Richardson (ts,fl) Johnny Griffin (ts) Tate Houston (bs) Bill Evans (p) George Duvivier (b) Philly Joe Jones (ds) Rec, 1962-2-27, NYC.

マイルス・デイヴィス、ジョン・コルトレーンなどとの共演や多くのミュージシャンがタッド作品をカバーしていることをとって、タッドがミュージシャンズ・ミュージシャンとして確固たる地位を保っていたことはもちろんだ。作曲の才能のほかにここでは短い時間の中に簡潔に主題を表現する編曲の才が発揮された作品を聴いて行こう。

次は個人的に、最も初期の極私的隠れ名盤だった作品。新宿のDIGだったかで聴いて、廃盤にはあまり手を出していない時分だったが、すぐに手に入れ、密かに聴いていた作品。CD化されたが、売れた形跡はない(笑い)。アレンジはジミー・ヒースとヴィクター・フェルドマンが担当している。

2曲目では、ヴォクター・フェルドマンのバイブのソロが聴かれる。サム・ジョーンズのチェロのソロも意外に飽きないで聴ける。キャノンボールは実質このセッションを仕切っていたようでソロを取るのは1曲のみ。(本日はかけません。)

『Sam Jones Plus 10 / The Chant』 (Riverside RLP-358)

M5. Four

4:28 BM,JH,SJ,

M6. Over The Rainbvw

6:40 SJ,VF

Sam Jones (b,cello) Nat Adderley (cor) Billie Mitchell (tp) Maelba Liston (tp) Cannonball Adderley (as) Jimmy Heath (ts) Tate Houston (bs) Wynton Kelly (p) Victor Feldman (p,vib) Les Span (g) Keter Betts (b) Louis Hayes (ds) Rec. 1961-1-13 & 26, NYC.

バリー・ハリスは相変わらず日本でも人気が高いが、最新の来日ではさすがにほとんど弾けていないということだ。この作品は 5 枚ほどあるリヴァーサイド作品の中でもいわゆる「正統派ピアノトリオ」でのバリーの真価を発揮した作品。長い付き合いになったジャーヴィスのドラミングも、もう現代のミュージシャンには叩けないリズムだ。

生きているビバップの伝説になったバリーの初期のバード名演作品集。

ここには、リヴァーサイドがビバップの洗礼を受けて進化するミュージシャンたちの温床だったことが窺える。

『Barry Harris / Chasin' The Bird』(Riverside RLP-9435)

M7.Still Life

5:20

Barru Harris (p) Bob Cranshaw (b) Clifford Jarvis (ds) Rec. 1962-3-31 /8-23

2011 年の第一回は、古庄さんのエルヴィン・ジョーンズ参加作品特集と、瀧口の裏街道サックス&モアでお送りしました。

茶会記 Riverside Jazz Story Vol.5 20110205

text by George Takiguchi (Studio Groovy) groovymusic@msn.com